

ユニバーサルデザインと行政Ⅱ

ービジュアルデザインの見地から・サインデザイナーー

北 尾 和 信
豊 嶋 幸 生

1. はじめに

デザインは、社会の中で多様な内容をもって語られ、その意味も広義に理解されている。また、これに対する期待もかつてなく大きい。特に近年はロナルド・メイスによって提唱されたユニバーサルデザインが、現在日本を含め世界的な広がりを見せている。

1913年にドイツのバウハウスでデザイン教育がスタートし、フランス人のレイモンド・ローウィがデザインの世紀の幕を開けるデザイナーとして出現した。彼は「デザイン・ヒーロー」として、アメリカのインダストリアルデザインを牽引し、日本にも多大な影響を与えた。日本では戦後、デザインは設計部門の補佐的な役割でスタートし、設計・生産される商品の表面的な形態、色彩、模様等の装飾を施す事を主な役割とした。その後は、1960年代には、優れた造形センスが、商品の機能向上に貢献し、設計の基本案を提示し、設計・生産に大きな影響力を示すにいった。

その後、デザイナーの自主的な計画の推進、技術開発が促進され、多様化した消費者の価値観へ対応する事が求められるようになり、1980年代に消費者への生活創造提案を積極的に進めることとなり、生活研究全盛の時代を迎える事となった。企業では「優れたものしか手に入れない生活者」、つまり消費者（大衆）から生活者（個への対応）をデザインの対象とした。

さらに、快適空間の創造と退屈しない人生の提案をめざし、バブルとも呼応して、時には過剰なまでのデザインが施されるようになった。メイスの提唱は、このようなデザインの変容・変節に対する警鐘であるとも言える。ユニバーサルデザインは、かつてはデザインが商品の機能の向上を目指したが、デザインが生活の機能の向上を目指している事に他ならないのではないだろうか。

2. ユニバーサルデザインの新しい時代

わが国ではデザインの新しい展開を図るべく、通商産業省が中心となり、1989年4月～1990年3月をデザインイヤーと定め、その後の事業として、デザインの啓蒙活動を積極的に展開した。この趣旨は「もの」の量的な充足が既に進んだその基盤の上に、「心」を充足する快適で潤いのある生活を希求することであった。当時の通商産業大臣に提出された答申のはじめには、次のような文言がかかれている。

『我々が通りすぎてゆく「生活シーン」のひとつひとつは、良かれ悪しかれ、いろいろな「デザイン」で満ちあふれている。我々は、このようなデザインに接したとき、無意識のうちに通り

すぎるときもあれば、魅せられるときもある。また、むせかえるような息苦しさを覚えるときもある。

今日、我が国は経済的な豊かさを享受するに至ったが、ふと身の回りを見渡したとき、この「生活シーン」の雑然とした調和のなさに気づくことがないだろうか。

デザインは、人々の生活の中に生きている音楽に響えることもできる。「美しく」、「躍動感あふれ」、「調和のとれた」音楽が人々の「心」を揺り動かすように、優れたデザインは人々の「心」をなごませ、明日への希望を培う。

このようなデザインの意味がいま人々の「心」に宿りは始めている。』

このようにして始まった 1990 年代のデザイン政策は、2000 年代に入った今日、着実に根ざし、その目指した・国民生活の充実、・生活文化の創造、・創造力の涵養についての成果を着実に向上させてきたといえる。さらには、地方の活性化とデザインシティが各地で図られ、地域を形づくる公共的な施設や商店街のデザインが改善され、調和の取れた美しい景観が実現の方向へと向かい、その地域に生活する人々の「心」にもデザインの意識が根付き始めた。このようにして始まった「デザインシティ」の実現は、さらに各地に広がり始めている。

3. JIS 案内用図記号の制定

不特定多数の人が出入りする交通施設、公共施設等に使用される案内用図記号は、一見してその表現内容を理解できることから、文字表示に比べて優れた情報提供手段であり、誰にでもわかりやすいビジュアル・コミュニケーションの手段として以前から着目されていた。古くは東京オリンピックの場など、多くの外国人が集まる場で活用されていた。

1964 年：東京オリンピック（勝見勝 デザイン）

1968 年：メキシコオリンピック（ランス・ウェイアン デザイン）

1972 年：ミュンヘンオリンピック（オトル・アイヒャー デザイン）

国際的なイベントにおいて、言語の壁を越えた図記号によって案内の用を足そうとする動きは、1960 年代に実用に供されるようになり、60 年代から 70 年代にかけて、図記号の有効性や重要性の認識が世に広まった。

しかしながら、国内的にも国際的にも標準化が遅れており、国内的には未だ標準化がなされず施設ごとにバラバラに使用されているのが現状であった。他方、社会の変化により利用者のニーズが多様化し、またユニバーサルデザインの見地からもその充実と統一化のニーズが高まってきた。一目でわかるシンボルを目指して Public Information Symbol の重要性がようやく認識された。

2001 年 3 月 1 日には、国土交通省より標準案内用図記号 125 種類が発表された。その策定の目的は次のようなものであった。

『不特定多数の人が出入りする交通施設、観光施設、スポーツ施設、商業施設等に使用される案内用図記号は、一見してその表現内容を理解できることから、文字表示に比べて優れた情報提

供手段です。しかしながら、国内的にも国際的にも標準化が遅れています。国内的には未だ日本工業標準（JIS）化がなされず施設ごとにバラバラに使用されているのが現状です。国際的にも国際標準化機構（ISO）によってわずか57項目が標準化されているに過ぎません。

一方で、社会の変化により利用者のニーズが多様化し、またバリアフリーの観点からこうした図記号の一層の充実、統一化の必要性が高まっています。

本ガイドラインは、こうした状況を受けて、交通施設、観光施設、スポーツ施設、商業施設等の国内諸施設に使用される案内用図記号の標準となるものを示すことを目的として策定されました。』

その後、2002年3月20日には「JIS Z 8210:2002」として標題 案内用図記号（Public Information Symbols）が制定された。その規格概要は

「不特定多数の人々向けの案内に用いる図記号を規定。案内用図記号を用いて情報を伝えることが好ましい領域は、例えば、公共・一般施設、交通施設、特定の場所・建物、観光、商業・小売店など、あらゆる施設のほかに、さまざまな地図、案内板、標識、印刷物などである。」というものであった。

この制定をきっかけに、サインデザインのユニバーサル化はいっそう加速するものとなった。

・施設（公共・一般施設など）のマークがJISで統一され、共通の視覚言語となった



JIS ではすでに標識などに使用される色が規格化されている。特にサインに使用される色としては、

赤……禁止、緑……安全、青……指示、黄……注意
の意味を持ち、色と形の組み合わせで、共通の認識を持つことができるようになった。

JIS 禁止マーク



JIS 注意マーク



JIS 指示マーク



4. 近年の行政の取り組み

施設・設備のユニバーサル化は、前報でも述べたように、新しい都市計画を伴った大掛かりな開発計画とともに進められることが多い。しかし、サイン計画は できることから取り組んでいく = Inclusive Design が可能である。一気に誰もが満足できるデザインをすることはもちろん理想的ではあるが、容易ではない。着実に一步步前進していくことが重要である。静岡県では平成 11 年に外国人によるユニバーサルデザインの町点検を実施した。その提言として次のような内容が指摘された。

- ・地名、窓口、庁舎名などの文字による表記には、よみかたをローマ字表記すれば、意味のわからないときにも周囲の人にたずねることができる。
- ・まちや建物の案内図や誘導表示を、駅、街角、バス停などになるべく多く設置する。
- ・サインは、大きな文字で表示し、色のコントラストをはっきりさせると、見つけやすくわかりやすい。
- ・駅の出入り口を、わかりやすくはっきり表示すると良い。(北口・南口など)
- ・大通りには名前をつけ、通り名の看板を設置すると良い。
- ・目印となる施設(銀行・百貨店など)の施設名看板があるとわかりやすい。
- ・絵や記号(ピクトグラム)を用いたサインはわかりやすい。
- ・トイレのサインに赤青の区別があるのはわかりやすい。
- ・駅の構内やまちの中に休憩できる場所が少なく、また屋根のあるバス停も少ないので、そういう点が改良されると外出しやすくなる。

これらの提言は、できることから取り組んでいく行政の姿勢があれば、容易に実現できる事柄ばかりである。しかし現実には、大規模な公共事業とセットとなり、ユニバーサルデザインへの対応をその基本コンセプトとする自治体の例が多い。

ユニバーサルデザインといっても対象となる人々は千差万別である。障害に関してもその状況は様々で単一機能の積み上げだけで多くの人々に使いやすいシステムは難しいのが実状である。しかしより豊かな市民生活を提供する姿勢で、多くの都市が『より豊かさ・やさしさ』をもとめてさまざまな取り組みを行っている。

○札幌市の公共サインシステム

札幌市のサインシステムへの取り組みは、ミレニアムを前にサインの全面見直しを図ったもので、できることから取り組んでいくユニバーサル・サインシステムの一例といえる。

その要点は次のようなものであった。

ユニバーサルデザインの対象者

- ・外国人 ・弱視者、高齢者 ・全盲者 ・車いす使用者

設計段階で配慮されたディテール

- ・障害のない人と、車いす使用者の両者に配慮した表示面の高さを設定
- ・案内サインと誘導サインは視距離が異なるため、表示面の高さを配慮

- ・案内サインの地色は、複雑な情報をわかりやすくするため、濃いベージュを基本とする
- ・案内板の掲載情報は、町の骨格（道路・公園など）、施設、主要交通機関、文字に分類、明度差をつけわかりやすくする
- ・主要交通機関は重要な情報であるため、路線がわかりやすいように鮮やかな色に設定
- ・誘導サインは情報をわかりやすくするため、ベースの色と文字の色の明度差を大きくする
- ・濃い色のベースには白文字、明るく淡い色がベースのときは黒などの濃い色を使用し、矢印の方向表示は文字よりも目立たない色にするほうが表示面の即解性がたかい
- ・高齢者に配慮した色彩（人の視覚には加齢による衰えと視覚黄変化がおこる）黄色と青の誤認が起こりやすいので配慮する
- ・高齢者は濁色よりも清色のほうが識別しやすい
- ・高齢者の視認性の確保には、色相よりも明度差が決め手になる
- ・誘導サインの文字は視認性を配慮し、従来の文字より大きくし、最低でも 50mm を確保する
- ・公園や広場では設置場所が高くなるので、最低でも 70mm を確保する
- ・4 ヶ国語で表記する（日本語、英語、中国語・韓国語）

わかりやすさを向上させるためのポイント

- ・「黄色」をアクセントカラーとして使用
 - すべてのサインに存在を明らかにするためのアクセントカラーを統一して使用
- ・ユーザー本位の指示情報設計
- ・2 方向で検索できる案内情報
 - 目的地の検索を地図と施設一覧の両方から検索できるよう設計
- ・5 施設までとした誘導情報
 - 目的施設を判読できるのは 5 項目以内であると考え設計。対象施設密集地は案内図を小さく併記
- ・メンテナンスフリー
 - 積雪寒冷地に配慮した除雪時の損傷に対処した設計とする

○さいたま新都心のサインシステム

1997 年 2 月に埼玉県は「バリアフリー都市宣言」を行い、将来の三市合併に向けたさいたま新都心の街づくりに入った。その方向性は「街全体のバリアフリー化」を明確にし、国の機関の移転も含めた大規模な開発事業で、その骨子としての、サインデザインの基本方針は健常者と障害者、高齢者などの弱者が共に利用できるシステムとすること。新都市としての骨格を認識するための要素とすること、新しい都市風景創出の一貫として寄与することなどが設定された。

- ・1997 年 2 月 バリアフリー都市宣言（埼玉県）
- ・1998 年 3 月 さいたま新都心のバリアフリーに関する提言（バリアフリー都市宣言の具体化）
- ・1998 年 5 月 さいたま新都心バリアフリー施設整備方針（その 1）を策定（ハードの整備

方針)

- ・1999年8月　さいたま新都心バリアフリー施設整備方針（その2）を策定（ソフトの整備方針）

- ・1999年度「さいたま新都心地区まちのサイン　歩行者系サインマニュアル」の作成

- ・2000年3月　バリアフリーのまちづくり推進計画策定（ボランティア活動推進計画策定）

が行われ、2000年2月には国の18機関が移転を開始し、4月　さいたま新都心駅が開業、5月には街開きが行われた。区域内の都市基盤整備、業務ビル開発の事業主体は、埼玉県のほか、都市基盤整備公団、国、地元3市（現さいたま市）、民間事業者等複数にわたっている。

当初の計画では、障害者を主体にバリアフリーがその基本理念であったが、ユニバーサルデザインの浸透に伴いさらに広範な対象へと広げていったものと考えられる。

さいたま新都心サインデザインの要点

- ・視覚、聴覚、触覚等の媒体に加え、人的なサポートを全体のシステムとして取り入れる。
- ・新都心駅の改札口正面に、交通、都市等を含めた総合サービスを行う案内所をサインシステムの一貫として設置している。
- ・案内所では、実験的ではあるが視覚障害者に対するセンサー型音声サインの端末の貸し出しなどを行っている。
- ・案内所には、ハードでは補えない都市生活に必要なさまざまな情報サービスを目指す。
- ・誘導ブロックは黄色をテーマカラーにして、新都市の中での案内誘導のランドマークとして位置、存在が分かりやすいようにする。
- ・情報伝達のための機能については障害者を含めた情報弱者、健常者等、一般の人々に対しても使いやすいように複数の情報選択肢を用意した。
- ・表示に関しては晴眼者用の詳細な案内地図と視覚障害者用の触知図、それと板面を共有し簡略化した地図と大きな文字によって弱視者、高齢者にも見易い表示を採用した。
- ・主要なサインにはボタンによって選択する現在地、主要施設の方向を案内する音声サイン、緊急時に聴覚障害者に対して緊急情報を知らせる電光表示等が一体的なサインとしてデザインされている。

○中部国際空港「セントレア」のビジュアルデザイン

中部国際空港「セントレア」は、2005年2月、愛・地球博を目前に供用を開始した。その基本理念は、次のような骨子からなる。

- ・世界の最新技術と知識を結集し、21世紀にふさわしい、利便性・経済性に優れた競争力のあ
る国際ハブ空港づくりに努める。
- ・「お客様第一」を旨とし、魅力あるサービスの提供を通じて21世紀の国内外の航空ネット
ワーク発展に寄与する。
- ・地域に根づいた企業として、環境への配慮に努め、豊かな地域社会づくりに貢献する。
- ・「オープンでフェア」を企業行動の基本とし、社会から信頼される企業市民となる。

このような考え方で民間主導のもと、計画された中部国際空港は、ユニバーサルデザインを設計段階から本格的に導入した日本では初めての空港である。その中で、情報伝達の重要な要素を占めるビジュアルデザインは、分かりやすさ、見易さへの配慮、ユニバーサルデザインを達成するために「直感的によく分かるサイン」をコンセプトとして設計された。

わかりやすさへの配慮

- ・全国空港ビル協会のビジュアルサイン統一化基準をもとに用語や色彩を決め、国際的にも国内的にも調和を図った。
- ・2002年に制定されたJIS案内用図記号を本格的に導入して、国内外の基準となるようにした。
- ・初めて空港を利用される方や、外国の方を含めことばが不自由な方にとっては、何よりもサインが頼りなので、動線が交わる場所や曲がり角はもちろん直線でも連続的に配置した。
- ・単純性では、とにかく簡潔で明快な表示を心がけた。用語はできるだけ切り詰め、1面に収まる情報も多すぎないように注意した。

見やすさへの配慮

- ・できる限り大きな文字を表示すること、従来の空港に比べて全体的にサインを大型化した。
- ・適切な文字高と視認距離の関係を確保するために、「公共交通機関旅客施設の移動円滑化整備ガイドライン」を上回るよう、基準を設定した。
- ・図と地の明度差の確保を図り、限りなく黒に近い「ミッドナイトブルー」を特色として、サインのベースカラーに使用している。
- ・読みやすい書体の選択では、英文と数字はディスプレイ書体で定評のあるフルティガ体を採用。

NAMEvariation123

フルティガ体

- ・ハングル文字と中文（簡体）については、和文標準書体に制定したモリサワ新ゴと同じイメージ、同じウェイト（文字の太さ）の書体。

デジタル文字は美しく進化する。

モリサワ新ゴ M

さまざまな工夫

- ・出発系にグリーン、到着系にイエロー、そして一般にグレイ色をピクトのベースカラーとして用いる。
- ・ピクトグラムは文字を補う複合情報として重要な表示要素なので、できる限り大きく扱う。
- ・内照サインの場合、あまり着色部分が大きすぎると、表示面全体の輝度がアンバランスになってしまう。そこで、ピクトのベースカラーはかすかに光りながら、その上をグレイのストライプで覆うことにより、面全体の照度の均一性を確保した。
- ・ストライプは新しいJISピクトのデザインと相性もよく、結果的にサインの「顔」をつくることができた。
- ・サイン器具の工夫。

- ・ビジットジャパン施策の一環としての他国語表示。
- ・案内図の充実。
- ・大型ディスプレイの採用による表示の工夫
- ・触知サイン

外部から館内の有人案内カウンターまで誘導する事を目的とする。その理由は至って明快で、空港のような非日常的な場所では目の不自由な人が単独で行動することはほとんど考えられず、人による介助が当然、との結論が出されたため。

- ・エレベーター表示の統一

複数台設置されていても、必ず右側にサインとボタン類をまとめて設置する。色彩はミッドナイトブルーで統一する。今までは設計上バランスをとるため、左右対称の配置はボタン類の配置も異なったが、使い勝手を考え統一されている。

- ・床パターン

床パターンは、積極的なサインというよりも、むしろ「アフォーダンス」(知覚用語でインターフェイスのデザインにアフォーダンスを利用すると、ユーザはその扱い方を知らずとも、その時々物体の方が扱い方を教えてくれる。つまりユーザがその物体について知っていなくてもはならない事の量を減らすことが出来る。)として計画された。

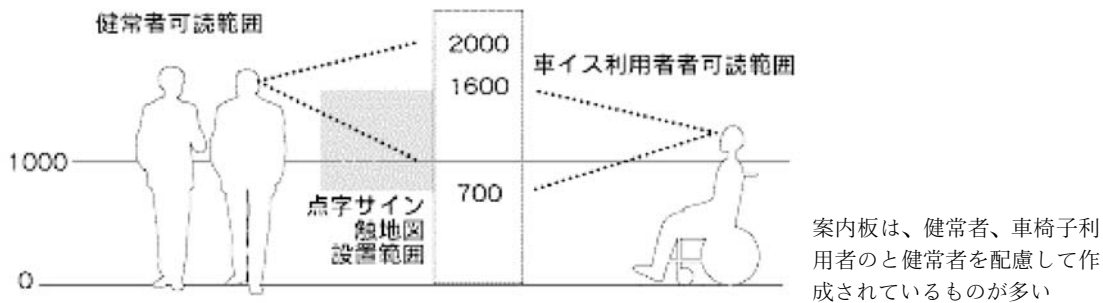
無意識のうちに流れに沿ったり、あるいは滞留したり、またスロープや踊り場などの注意喚起にも使われている。

楽しさの演出

「ちようちん横町」、「展望風呂」、「ウェディングパーティーもできるレストラン」など、何かと話題を呼ぶ中部国際空港だが、サインも楽しくなければユニバーサルではない。このような考え方から、サインの表情そのものが自然に情報を伝えようとアピールすることで、読もうと努力しなくても内容が直感的に目に入り、ストレスフリーの楽しい空間を演出することを優先課題として設計された。



福山駅前のサイン計画 ユニバーサルデザインを積極的に取り入れている殆どの都市で日本語、英語、ハングル、中文（簡体）でかかれているものが多い。



5. 高齢化社会に向けての自分自身のためのデザイン

ユニバーサルデザインは、高齢者や、障害者のためのデザインであると把握されがちである。バリアフリー・デザインと同義に捉えられることが多く、言葉のすり替えに終わることが多い。このように健常者と生活弱者を区別し、生活弱者のみを対象とすることは好ましくない。前例にもあるように文字を大きくすることにより、案内板や標識にこめられる情報は制限され、健常者には不満が出かねない。健常者のための一般的なデザインと、高齢者や障害のある人のための専門的なデザインという分別は、ユニバーサルデザインの「公平な利用」の原則から外れる。違いを前提としながらも、人を分けないデザインを指向することは、ユニバーサルデザインの基本的な姿勢と言える。

誰もが満足できるものをデザインすることは、理想的ではあるが、容易ではない。「誰も」の範囲があまりにも広範すぎ、デザイン上の障壁が高くなりすぎる。しかし、「二つを分けないで、ひとつのデザインをする。」考えが次第に根付き、「Design for Our Future Selves」、自分自身の未来のために、精神的な豊かさ、『心』の充足を求め始めている。デザインイヤーの趣旨でもあった「デザイン」活動は、人間の物質的、精神的な諸要求を最も十分に満足させる調和のある人工的環境を形づくることを意図する創造的活動として意味を持ち始めた。

ユニバーサルデザインを念頭に置いたビジュアルデザインは、すべての人々の自立性を育むための環境を提供することにもつながる。このような環境を創り出すことこそ、活気のある街づくりに繋がる。

さいたま新都心計画でも、ボランティアの活用的重要性が求められたが、ビジュアルデザインにおけるサイン計画は、本来は何もしないことなのかもしれない。この報告で取り上げたように、インフォメーションセンターまでの案内のためのサイン計画を重点的にしている事例が多い。サイン計画は、ハード面の充実であり、サイン計画のソフト面の充実は、コミュニケーションを活性化させることにある。

誰もが、街に出て、初めての土地、初めての施設でも目的とする場所に容易にたどり着けるようにするには、コミュニケーションの充実以外にはない。誰もが気軽に尋ねられる、気軽にこたえてくれるこのような人間関係を構築していく事が、最重要課題でもある。サイン計画や案内表示板は、人通りの少ない場所での補助的な手段と考えるべきである。誰もが経験するように、「親切」に道を教えてくれる、この厚意は、心に残る街という印象を与え、住む人の心の豊かさ

を感じさせ、初めて訪れた施設や街の温かさを分け与えてくれる。

本当に大切なことは何か、皆が気がつかなければいけない。コミュニケーションの本来の姿は人と人との心の交流であり、街にサインを氾濫させ、「見れば分かる」という態度をとることは好ましいとは思えない。ユニバーサルなサイン計画は、その地で生活をする人々が、簡単にできること、できることから取り組んでいく姿勢、街での人の交わりを活性化することに他ならない。